

市人教ニュース

第449号 2014. 11. 30発行

大阪市人権教育研究協議会

TEL・FAX

6655-4005

Mail sijinky@hotmail.co.jp



子どもにどんな価値観を育てたいのか

幼稚園ブロック教育講演会②

10/18 滝川幼稚園

常磐会短期大学のト田真一郎さんを招き、「あそび」を通しての集団づくり～対等な関係を育むために大切にしたい視点～をテーマにお話を伺いました。



【気になる子は誰か？】

「気になる子」をどう捉えるか。その文脈は広い。発達や支援の面だけではない。担任の方から見て

「ちょっといろいろな面で気になるな」という子も含む。

気になる子として真っ先に上がってくるのは、保育者にとって困る行動をする子・逸脱行動をする子である。そんな子は何かしらメッセージを発している。保育の流れを絶妙なタイミングで折る子ども…。

ある3歳児クラスの先生から相談を受けた。歌を歌おうとするとときにふざける子がいる。寝転んだり、隣の子にチョッカイをかけた。 「ちゃんとする」と約束しても次の瞬間すぐに遊んでしまう。典型的な逸脱行動である。しかし全く歌わないのかと聞くとそうでもないらしい。最近、歌わなかったのは『シャボン玉』、歌ったのは『南の島のカメハメハ』の後半だったそうだ。さらに聞いていくといろいろなことが見えてきた。その時点では保育園でまだシャボン玉をしたことがないこと、家でもシャボン玉をしたことはなさそうなこと…。シャボン玉のイメージが持てないから歌が楽しくなかったのではない。逆に『カメハメハ』はドラゴンボールZのカメハメ波ポーズをしながら歌っていたそうだ。つまり、先生は「ちゃんとしない問題」と捉えていたが、子どもにとっては「歌が面白い面白くないか問題」であったのだ。その認識がずれてしまっていた。表面的な姿、現象面だけを捉えていてはそういったことに気づけない。一歩踏み込まないと問題解決にはつながらない。

【自分はどんな人間か】

ある保育所の映画会に参加した時に一人の子が寄って来てこう言った。「この保育所で一番悪いのはぼくやで」と。担任の先生はビックリされていたが、納得せざるを得ない部分もあったようだ。怒ったら石を投げる等、出方が激しい子だったからだ。周りの友だちも保護者も先

生も、どこかで「この子は何をするかわからへん、とんでもない子」という見方があった。その見方は内面化される。その子は4歳の時点で「ぼくって悪い子」という自分の見方、自己否定を作り上げてしまっていた。

もっと小さい年齢—2歳ぐらいの子でも、友だちからオモチャを取られても言い返せない場面が続くと「取られても当たり前」と自己否定してしまう。友だちから軽く見られている、怖がられている、自分の思ったことが言えない、周りの子が受けとめてくれない、そんな経験が重なると自己否定をするようになる。

「ごっこ遊び」は周りが受けとめてくれるから初めて成立する遊びである。「ここを玄関にしような」と提案して、周りが了解するから成り立つ。AちゃんとBちゃんが「ここ台所やで～」と言ったら話が通るのに、Cちゃんが「ここにトイレあることな～」と言ったら、「そんなところにトイレはない」と切られる…。受けとめられていないという姿である。それも気になる姿ではないか。子どもの目線から見た「輝けていない姿」ではないか。

【気になる子どもへのアプローチ】

子どもの現実を捉えることが保育課題の明確化につながる。行動ばかりではなく、事情を知り、その内面を理解することが重要である。次のような例がある。

4歳児で鬼ごっこをしていた。先生がワニでワニに食べられたら一回休みでベンチに座る。逃げている人が安全地帯に逃げ切ったら復活するというようなルールだった。しかしAくんはワニにタッチされてもずっと逃げていた。当然周りの友だちが「ずるい！」と怒り出した。

先生は注意する前によくよくAくんに話を聞いてみると、「追いかけてくる先生の顔がおもしろかった。みんなが走っているから走っていた」という。つまり彼は「鬼に追いかけて、捕まらないように走る」という鬼ごっこの一番基本的なルール、鬼ごっこ本来の面白さに出会えていなかったのだ。それで逸脱行動に出ている。周りの子はそんなAくんの“事情”がわからなかった。

一人の子の課題と捉えるのではなく、その子と周りの子との関係の中で課題を捉えていくと問題が見えてくる。

【クラスの最終段階での姿—ねらいの明確化】

わかりやすいのは野球部。歴代の強豪校であれば甲子園出場という目標が共有されている。練習を休もうなん

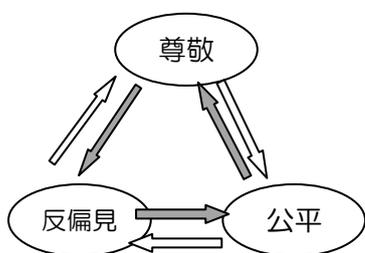
て発想はない。やっとメンバーが揃ったという学校なら野球を楽しむことが目標で「今日はちょっと休むわ」もあるかもしれない。集団が持っているものの考え方が違えば、その中での行動パターンも変わる。いろんなことの受けとめ方も変わる。しかし、クラブとクラスが違うところは「好むと好まざるに関わらずそこに放り込まれている」というところである。クラスにはいろんな子がいる。となるとある一定の強い方向性を生み出していくというよりも、いろんな子がいきいきとできる価値観をつくり上げていく必要がある。特に意識しておきたいのは「気になる子」のクラスの受けとめ方である。

5歳児のクラス。お昼の準備をグループでしている時、タカシが突然泣きながら怒って教室を出ていった。何人かが追いかけて理由を聞くと「ヒロシが俺のことを笑ったんや」と言う。女の子が間に入って聞くと、ヒロシは違う子のことを笑っていたという。タカシは気を取り直して戻ってきた。すると女の子は「あのな～タカシ、急に飛び出して行かんといてな。みんなビックリするから。そんな時は私らに言うてや～みんなで話聞くから」と。5歳の子がこんなことを言うかと驚いたが、それを言えそうなクラスでもあった。「あの子が言いたいのはここやねん」というのを一年間かけてつくってきたクラスだった。これは冬場の出来事で、その時にはそんなクラスが出来あがっていたのだ。みんなが生き生きとできる価値観をどう育てていくのかがポイントとなる。

【協動的な学びとは】

5人で話し合っているにも実際には弁の立つ2人が回しているということがよくある。「長いものには巻かれる」という心を育ててしまっている。まずはお互いの意見を全部聞いた上で、相手の意見を尊重し、取り入れながら進めていくことが大事だという雰囲気をつくっていかないと、協働にならない。お互いを尊重し合える価値観が大事である。それはどんな価値観だろうか？

【人権力のトライアングル—尊敬・公平・反偏見—】



玉置哲淳さんが提唱されたコミュニティで育てたい価値観で、説得力と普遍性がある。

①人間を尊敬する力

【尊敬・リスペクト】

「自分ってまあまあイケ

てるやん」一園田雅春さんの言葉で、まずは自分が好きという気持ち。就学前の教育で一番中核にしたい。この思いが持てれば、小学校に入ってから、いろんな人と関わって学習していく場面でもうまくいくことが多い。

②公平性の獲得【公平】

お互いに自己主張して、解決・調整の必要性を感じる

こと。そのためにぶつかり合いが起こることが必要だ。遊びや生活の中でぶつかり合いながら、公平性を追及していき、最終的には公平性を理解し自分たちでコントロールができるようになる。

「ごっこ遊び」は役割決めなどでぶつかり合いが起こりやすい。海賊ごっこで常に船長役をする子がいた。その子は船長が一番偉いと知っていた。私は船員役の子を焚きつけて、「俺も船長やりたいわ！」と論議を起こさせた。するといつもの子が「じゃあ、みんなで船長になろう」と提案した。みんな喜んだ。「でも、みんながバラバラのこと言ったらややこしいから、1番船長、2番船長…を決めようや。俺、1番船長な！」「う、うん…」。役者が一枚上だった。3日後ぐらいに「前と変わらんやん！」と気がついて、交代制が提案されました(笑)。

③偏見をなくす【反偏見】

クラスの中には、背景となる文化の違いがある子どもや、障がいがある子どもがいる。違いが偏見につながるように正しい認識を育てていくことが大事である。

【めざす集団像に向けてのプロセスを考える】

遊びの中で、面白さを獲得することは保育のねらいの中核を成す。発達に応じて面白さは変わり、保育者のかかわり方も変わってくる。

鬼ごっこについて、1～2歳児であれば、ふれあいを楽しんでいる。3～4歳児であれば、捕まえることや逃げることのおもしろさを知る。5歳児だったら、作戦を考えたり、やり方を工夫したりする。発達の流れの中で、どのように面白さが発展していくのかが見えて来ると、一人一人の子どもに対してどんな援助が必要なのか全体図が見える。

それぞれ遊びの中でどんな人間関係が生まれているのかを考える。高才二・氷才二・ケイドロ は、人間関係が異なる遊びである。高才二……オニがいれば成立する遊び。氷才二……助け合いが起こる遊び。ケイドロ…チーム対チーム 協力し合う遊び。

集団づくりに大切なことは、集団は育てるものであるという意識をもつこと。気になる子どもの理解をもとに、クラスの全体の問題は何なのか、どのようなクラスになってほしいかを考える。『この遊びの中で、この子どもがこのようなやりとりができるようになってほしい』と、具体的に保育の見通しをもつことが大切だと思います。